

ずいそう



建設機械の思い出

島 弘



私の生まれ育ちは、徳島県の旧木屋平村というところです。四国三郎とよばれる吉野川の中流にある穴吹という町から支流の穴吹川をさかのぼり、宮尾登美子さんが「天涯の花」の舞台としてくれた西日本第二の標高 1955 m の剣山の南東斜面にあります。村名の「木屋平」は「コヤ平氏」から来ているという平家が壇ノ浦の戦いで敗れたのちに落人した伝説がある山の中です。時代としては、唯一の交通手段は穴吹川に沿ったくねくね道、四国電力が来るまでも電気はありましたが、テレビを見るには家庭用トランスで電圧を上げないといけない始末、電話は集落に一台から徐々に各家に増えていったような時でした。林業はまだ植林している時代で、所得になるような産業はなく、道路、電気、通信、今でいうインフラ整備の始まりの時だったでしょうか。

私が小学校からの帰りに見たものは、今まで通っていたわだちがぬかるんだ砂利道をスクレーパで平らにし、コールタールの上に砂を撒くという簡易舗装の工事でした。少し年が進むと今度は道路拡幅のために岩に発破をかけていて、キャタピラのパワーショベルが砕けた岩をダンプトラックに積む作業の横をすり抜けたものでした。道を広くし、砂利道を舗装してくれるスクレーパ、パワーショベルは我々のヒーローだったように思います。同時期に、家の周りの段々畑の中に電信柱が立っていくのにも興味を持ちました。人力作業だったのでしょいか、クレーンが入れるような場所ではなく、機械の記憶はありません。特に印象に残っているのは、パワーショベルの力強さと器用なことです。穴吹川沿いの幹線道路の整備とともに、その道路から各集落に車が通れる農道が造られていました。幹線道路から 200m くらい上った我が家の前の畑の中を道が延びて行くのをパワーショベルの運転手さんに怒られながら脇で見ていたものです。パワーショベルは何と器用なことか、両キャタピラとショベルの昇降・

回転の操作だけで、土や岩を削る、運ぶ、均す、固めるなどをこなし、それ一台でどんどん道が出来て行くではありませんか。

私は小さい頃から機械もの、特にエンジンのことが好きで、今も続いている月刊「自動車工学」という専門誌を読んでいた記憶があります。大学工学部の専門誌として土木の道に進みましたが、小さい頃のテレビよりも建設機械が活躍するのを見ていた実体験の影響があるのかも知れませんが、今後も優秀な技術者や作業員が必要なことは言うまでもありません。そのためには、土木という仕事に興味を持ってもらう必要があります。今の小さな子供たちが自分の身近で工事の脇から作業を見るという機会は少ないことでしょうか。子供たちにとって人では出来ない事が出来るものに憧れるのは昔も今も変わりないと思います。人間の物理的能力を超越した建設機械には子供たちが興味を持つに違いありません。建設現場によっては「現場や作業が外から見えるようにすること。広報にもなるし、何よりも見られることによって現場が綺麗になるだろう。」というキャンペーンをされているところもあると聞きます。また、テレビ番組では、「ほこ×たて対決」の「VS ロードローラー」や「最強重機綱引き決定戦」などで建設機械が主人公で登場し、パワーショベルでワインを注ぐ競技対決などがありました。ちょっとしたアイデアで、一石二鳥になるような活動はないものかと思います。私が懇親会等の挨拶でよく申し上げるのは、「お孫さんやお子さんに買うおもちゃは、建設機械にしてください。出来れば砂場に一緒に行ってください。」です。